

会場：鹿児島県姶良市蒲生町北

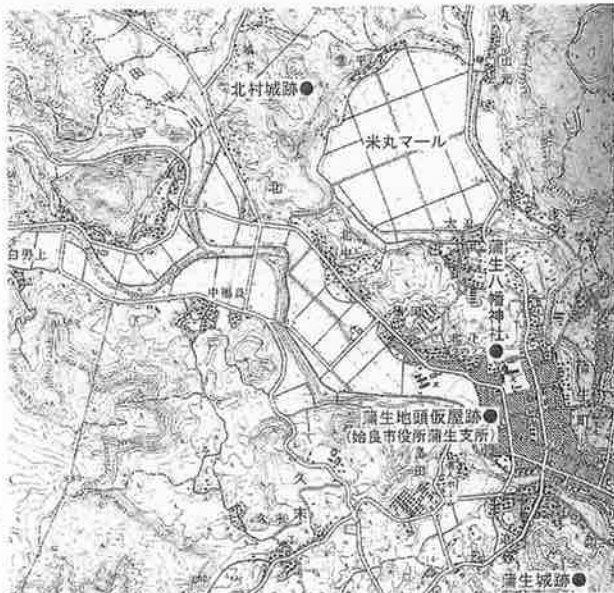
蒲生の北村城跡について

下 鶴 弘

1. はじめに

北村城跡は、姶良市蒲生町北に所在する戦国期の蒲生城の支城であり、大隅合戦で注目される要害城である。姶良市企画部企画政策課市誌編さん室では、通史第2巻中世・近世編の資料収集として、令和元年度に北村城を含む戦国時代の市内山城跡 6 か所をレーザー測量し、赤色立体地図及び等高線図を作成している。本論では北村城跡の調査概要を報告する。

2. 北村城跡の位置



第1図 北村城跡位置図(国土地理院2万5千地形図)

北村城跡は、本城の蒲生城から北北西へ約3kmあり、蒲生市街とは約2kmを隔てている。城跡の東には縄文時代の爆裂火口である米丸マールの水田が広がり、西側には田平川とその支流が流れている。

3. 北村城跡の歴史的環境

『薩藩旧伝集』巻ノ一に北村城について、次の記述がある。「貴久公御代蒲生の城御攻の時、北村の城とて出城有之候、此城山矢筈の如く有之矢筈か城とも申候、本城とり北の方に有之候、蒲生兵糧蔵の由にて蒲生一族罷居兵糧を樽に入夜々川に流し蒲生本城へ入たる由也、(略)」北村城は本城蒲生城の兵糧蔵と位置付けられている。

また、『三国名勝図会』によれば、「北村城 地頭館の亥方、廿三町餘、北村にあり、矢筈城ともいへり、蒲生ノ旁族北村氏、代々これに居城せり、按に北村氏は、蒲生氏五世、清直が第二の男、清則、北村二郎と号す、是に出しなるべし、弘治元年(1555)正月、大中公(貴久)、貫明公(義久)軍を發しこれ向ふ玉ふことあり、(弘治)三年、蒲生範清落去の時、城主北村伯耆守清康、当城及び中嶽山に拠るといへども、同時に陥りしとなり、」とある。

北村清康は、蒲生合戦のときの北村城城主であり、天文24年進攻した島津貴久の軍をその知略で大敗させたが、弘治3年(1557)に蒲生城落城と同時に島津軍に降伏した。『蒲生郷土誌』第4編中世の蒲生には、「北村城下の戦い」という詳しい記述がある。

蒲生合戦直後の蒲生地頭は比志島国守が勤め、北村地頭には弟の比志島国真がつとめた。

『上井覺兼日記』天正二年(1574)十一月九日の記述に、島津義久が伊集院忠棟に郡山の替地として比志島国真の領地であった北村を与えた記事が見える。また北村牧の別當という役名も見える。



第2図 北村城跡周辺赤色立体地図



第3図 北村城跡小字界図及び地籍図

4. 北村城跡の城域について

〔広義の北村城跡〕

広義の北村城跡の範囲は、南北の尾根筋を外郭と捉え、東側の米丸側絶壁を利用している。開口部は西側に2か所である。外郭の延長は約2.2 kmである。南尾根筋は標高156 mあり、南北に尾根が分かれ、中央部は土橋状につながっている。この南尾根南端には、巨石が多く南斜面からの侵入を困難にし、東側は絶壁となっている。南尾根一帯は、小字「城ヶ平」であるが、南斜面には明確な土塁や空堀などの遺構は確認できない。

北中へ延びる尾根には、本来空堀が想定されるが、米丸へ通じる道路のためにより大きく開削されている。

北尾根筋はやせ尾根であり、尾根上に曲輪を構成する広さはない。現在の城下集落は、広義の北村城跡の西側に集中している。

〔狭義の北村城跡〕

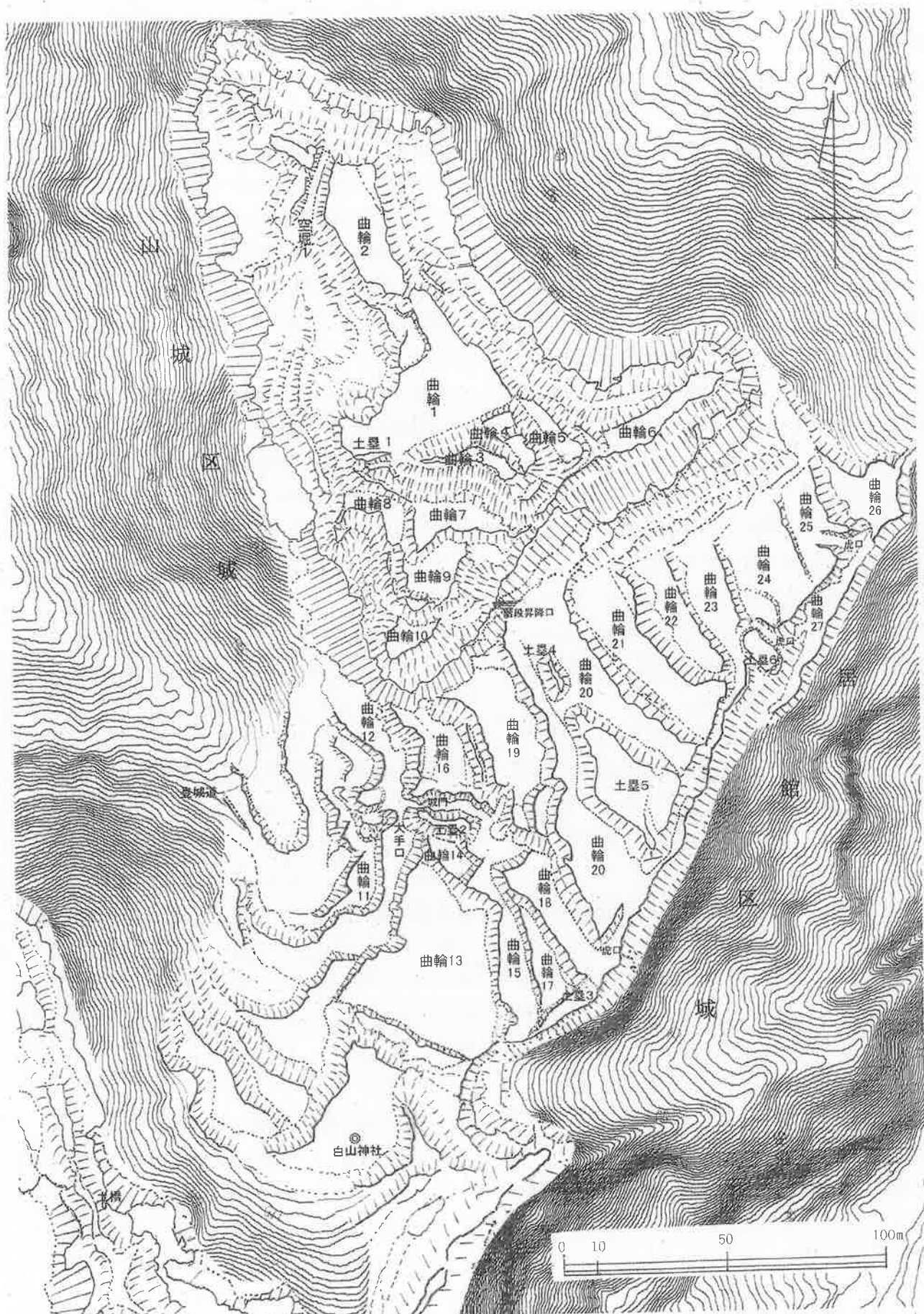
南北の尾根に囲まれた中央には山城区域があり、北西に向かってヤツデ状に小さな尾根と谷が延びており、小字名の「鬼ヶ迫」を彷彿させる。

北村城跡の範囲は、標高155.2 mを最高所とする山城区域と標高124.3 mを最高所とする土塁を含む居館区域に分かれる。山城区域の面積は19,425 m²あり、居館区域は大手口を含めて20,975 m²ある。両者を合わせた狭義の北村城跡の面積は、40,400 m²であり、小字「小迫」に含まれる。

5. 北村城跡の縄張について

『鹿児島県中世城館跡』の城館跡一覧による北村城跡の属性は、立地：丘陵、現況：山林、規模形状：200×500複、残存度：不良、存続期間：鎌倉時代～弘治3年、築城者・在城社：北村氏、遺構：帯郭・空堀・土塁・礎石・櫓台・大手・からめ手、備考：別名 矢筈城・高城となっている。

遺構の残存度は不良となっているが、山城区域は隔絶した絶壁に防禦されているため、元々の遺構は少ない。これに対し、隣接する居館区域は虎口や土塁が確認され、保存状態は良好といえる。



第4図 北村城跡実測平面図 (始良市企画政策課 赤色立体地図及び等高線図を合成し修正した。)

〔居館区域〕

第2図中の登城口から南尾根筋と山城区域が織りなす深い谷筋を北西から南東に向かって次第にのぼり道を進むと曲輪11に達し、曲輪12の中央部には、大手口の城門跡と推測される高さ約6～6.6mの遺構が残存している。大手右手には、曲輪14の上に土塁2が構え、左手の曲輪16により長さ約24メートルの隘路を構成しやや右に折れる。城中を通る現在の里道は、大手口(H93.7m)から曲輪19(H110.5m)を抜け曲輪20北端に達しているが、山城山頂までの最短距離であるため、本来は曲輪19を経由せずに、回り道である曲輪15・土塁3・曲輪18・曲輪20(H115m)に出て、高さ約8mの土塁5(H125m)や土塁4の圧迫を受けながら曲輪20北端にある山城山頂へ通じる階段昇降口に達したのではないかと推測している。

ここまで解説した曲輪11から曲輪20(土塁2～5)までは、広義の大手口区域と言えるだろう。

居館区域は、曲輪21～25までであり、曲輪26・27は通路を兼ねた帯曲輪である。

曲輪26から曲輪25までは、高さ6.7mある。曲輪26から北東方向には、北尾根筋を構成する山麓まで崖地と深い谷によって形成された、長さ約80mの土橋状の尾根があり、途中に土塁状の遺構が見える。

曲輪21・22・23の南端には崖沿いに通路があったと思われるが、現在では判然としない。曲輪27から曲輪24へ入る虎口には防御性の高い土塁6(高さ8m)があり、向いの曲輪24南端にもやや高い箇所がある。曲輪24は居館部の中心と考えられ、東西の曲輪25と曲輪23が控えの敷地であろう。曲輪25の東角には虎口が開いている。

〔山城区域〕

北村城跡山城区域の周囲は、高さ10m以上の絶壁に囲まれている。北端から急峻な崖を登る可能性があるが、実際には非常に困難である。長さ24m×深さ3mの空堀1により曲輪2とは遮断されている。

山城区域の主郭である曲輪1・2への登頂は、やは

り曲輪20の階段昇降口から連絡し、曲輪9・曲輪7を経て、曲輪3西端と土塁1の間を虎口と捉え、曲輪1に到達していたと考えている。

階段昇降口の周囲は、凝灰岩の切り立った絶壁であり、山城への昇降口は、荒い切石が積み上げられ、わずかに片足を乗せるほどの登り口が見えるが、残念ながら高さ4mほどの位置で道は途切れている。この位置での崖地の高さは約6～7mであり、北村城全体の曲輪配置からこの場所を山城区域への昇降口と考えている。

曲輪1の主郭に対し、登頂してくる南側に高さ約15mの曲輪3があり、これは実際上土塁の機能があり、土塁1とともに防御性を高めている。伝承では矢倉跡と言われている。曲輪4(上下二段)の東側には、帯曲輪の曲輪5があり、さらにその先には曲輪6が北東方向に40mほど延びている。

6. 最後に

北村城跡のすべての城域を今回踏査したわけではないが、今回3月に実施した登城道(里道)の草払いにより、大手口周辺の様子が判明し、またこれまであまり注意が払われてこなかった、居館区域の存在を確認できたことは、北村城跡の従来の解釈に一石を投じることになるだろう。

別称として残る「高城」が、山城区域及び居館区域の総称であり、「高城」と南北の尾根筋が構成する広義の北村城域に対して「矢筈城」という呼称が起こったのではないだろうか。居館部は植林を受けているが、全体としては保存状態の良い山城跡と言えるだろう。詳細については今後の調査に期待したい。

〈参考文献〉

- 1.『三国名勝図会』 青潮社 1982年
- 2.『新薩藩叢書(一) 薩藩旧伝集』巻ノ一 歴史図書 1971年
- 3.『大日本古記録 上井覺兼日記 下』 東京大学史料編纂所編纂 岩波書店刊行 1991年
- 4.『蒲生郷土誌』 蒲生町 1991年
- 5.『鹿児島県中世城館跡』 県教育委員会 1987年